



『世紀末は終わってしまった』

世紀末は終わってしまった。

僕たちは20世紀の後半に誕生し、もっぱらファミコンをやって過ごした。そりゃあ、夏休みになればクワガタを採りに行ったり、ドッジボールに夢中になったりもしたが、少年期の大半はファミコンをやって過ごしたはずだ。勉強なんて学校だけでウンザリだったし、むしろ覚えなくてはならないのは攻略法と裏技のコマンドだった。ファミコンと少年ジャンプから友情と裏切りとを教わって僕たちは成長していった。

世界では相変わらず景気がどうだの、アメリカがどうだのの話ばかりで僕たちは退屈していた。もう、仮面ライダーやウルトラマンに憧れる年齢ではなかったし、かといって女子と遊ぶのは恥ずかしく思う中途半端な年齢だった。僕たちは相変わらずゲームに没頭し、毎週水曜日にはドラゴンボールを観ることでトモダチと意志疎通を図っていた。その頃の僕には忒千年がまだ二十世紀だってことも、ましてや今が世紀末だっていうことも知らないただのクソガキだった。

「世紀末はもうすぐそこまで来ている」雑誌の表紙を飾るこの言葉は、僕にはかなり格好良く写った。世紀末はもうすぐそこまできている。その時の僕の思考回路は、マッドマックスの砂漠化した地球のヴィジョンではなく、北斗の拳の荒廃した世界へと飛んでいた。つまりまだクソガキであったのだ。世紀末という言葉の中にその時の僕は何を求めていたのだろうか。人類の滅亡か？それとも火星人の地球侵略か？それとも第三次世界大戦か？多分その時の僕にはそんな終末思想的なモノではなく、もっと明るいワクワクするような冒険が始まる予感的なモノであったと思う。すでに考えはゲーム的なものになっていたのだろう。リアルなRPGが始まるのだと思っていた。僕が主人公で、トモダチとパーティを組んで、どっかにいるはずの世紀末を司る大魔王を倒しに行く。そんなことを考えていた。だから僕にとって世紀末というのは素晴らしく光り輝く未来だった。いつも考えていた。僕の輝かしい戦歴とともに世界は平和の時代を迎え、英雄気取りの僕は骨の付いた肉をほおばっている。または、大魔王にさらわれた王女（同じクラスの好きな娘）を見事救出し、王女とともに生活する。とにかく夢想の中に世紀末を見ていた。

でも、その世紀末は終わってしまった。

その頃には忒千年が二十世紀であることも、ノストラダムスの大予言の話も、同じクラスの好きな娘が王女様であるわけがないことも、例えそうだとした僕が彼女を、その大魔人とやらから救出することが不可能であることも、SEXの楽しみも、不景気だと嘆くことも、リセットボタンがこの世に存在しないことも、僕は知っていた。

近づいていたのは世紀末ではなく新世紀だったのだ。結局人類の滅亡も、火星人の地球侵略も、第三次世界大戦もおきなかった。そして僕は魔王を倒しに行く準備も、母親から「あなたはロトの血を引く最後の子孫なの」という台詞も言われぬまま、新世紀というなんだか漠然とした時間の渦に取り込まれてしまった。いつの間にか大人の仲間入りをして、会社という組織の一員となり、毎月の給料を楽しみに生活を送っている。「こんなはずではなかったのに」と何故だか内側から声が聞こえたりする。

それでも僕は人生の大半をファミコンをやって過ごすだろう。世紀末は終わってしまったけれども、次の世紀末まではとても生きられないけれど、なんだか他人事のように楽観的に、僕は

ームをして過ごす。終わってしまった二十世紀を忘れないように。行けるならば、昔聞いた「虚構の中の現実」というマトリックスな世界に。願うならまたあの雑誌を目にした時のワクワクしているクソガキだった少年期に・・・。